

成果2 外郭西辺の確認

調査区の北側で外郭西辺を確認しました(第2図)。構造は築地塀で、3時期(A→B→C期)認められます。A期は、今回発見された門よりも古い時期のものです。基盤となる整地層と築地本体を確認しました。B期は整地層と掘立式の寄柱、C期は整地層と礎石式の寄柱を確認しましたが、本体は残っていませんでした。B期とC期の築地塀は、それぞれ掘立式と礎石式の門に伴うと考えられます。

調査区南端では、3つの整地層を確認しました(a→b→c)。整地層a・bは部分的な確認のため、規模や性格は不明です。時期は門より古いです。整地層cは、上面で掘立式の門の柱穴が認められたことから、門建設に伴う整地層と考えられます。

また、門の北側で、築地塀A期を切り通した幅5mの通路と推定される遺構が見つかりました。使用された後に政庁第Ⅲ期の軒丸瓦を含む多くの瓦が廃棄され、築地塀B期の整地層に覆われています。

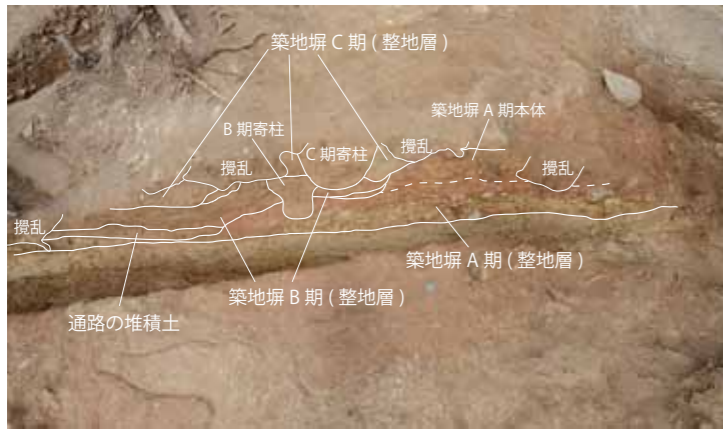


写真7 調査区北側 築地塀A～C期の断面(南から)



写真8 調査区南西隅 整地層a～cの断面(南から)

まとめ

1 平安時代の門を新たに発見しました

掘立式と礎石式の八脚門で、前者から後者へ建て替えられています。今回の調査地点は、丘陵が低地に向かって大きく張り出す位置にあり、門はこの先端で発見されました。これまで見つかった南側の外郭西門も同様の立地であり、多賀城の西辺ではこのような地形が選ばれて門が造られたとみることができます。

2 外郭西辺を確認しました

調査区の北側で築地塀を確認しました。築地塀は3時期認められます。今回の調査区の北側に位置する第17次調査区でも、政庁第Ⅲ期以前と第Ⅲ期、第Ⅳ期の3時期の築地塀が確認されており、今回確認した築地塀はこれらと対応する可能性があります。

調査要項

所在地：宮城県多賀城市市川字丸山地内

調査指導：多賀城跡調査研究委員会(委員長 佐藤 信)

調査主体：宮城県教育委員会(教育長 伊東昭代)

調査担当：宮城県多賀城跡調査研究所(所長 高橋栄一)

調査協力：多賀城市教育委員会

調査員：高橋栄一・白崎恵介・村田晃一

村上裕次・高橋 透・下山貴生

調査期間：令和元年5月22日～10月18日(予定)

調査面積：約300㎡



宮城県多賀城跡調査研究所
〒985-0862 宮城県多賀城市高崎1-22-1
TEL: 022-368-0102
FAX: 022-368-0104
<http://www.thm.pref.miyagi.jp/kenkyusyo/>



多賀城跡

第93次調査現地説明会

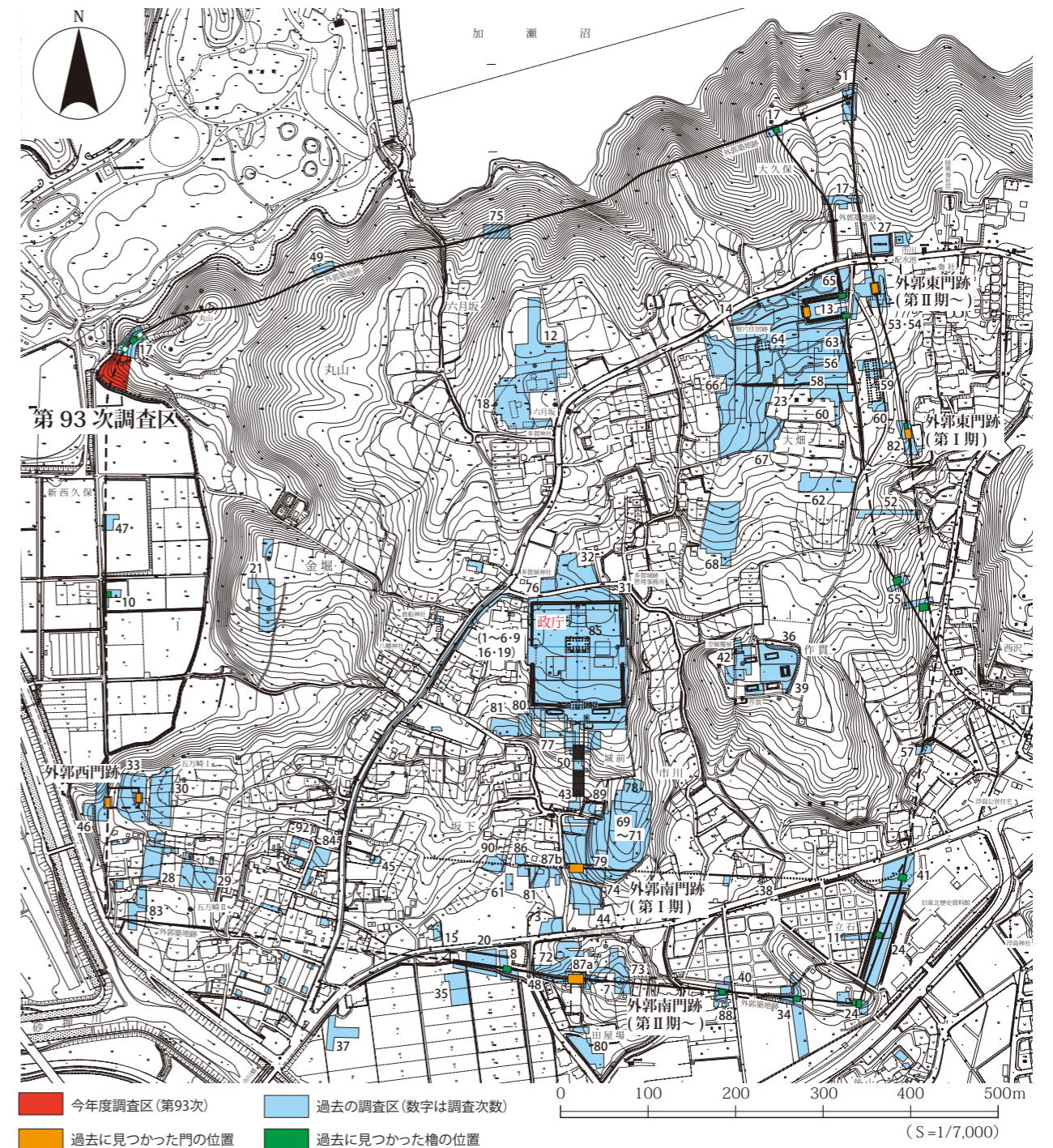
令和元年10月14日(月・祝日)

午後1:30～

はじめに

宮城県多賀城跡調査研究所では、昭和44年以来、特別史跡多賀城跡の発掘調査を計画的に実施し、遺跡の実態解明に向けた研究を進めています。近年は、多賀城跡の外周りを囲む外郭施設の解明を目的とし、今年度の第93次調査では、丸山地区で外郭西辺北部の調査を実施しました(第1図)。

外郭西辺の調査は、これまで5箇所の地点で行われていますが、外郭北西隅を対象とした第17次調査と南西部の外郭西門を確認した第46次調査以外は、いずれも奈良時代の外郭西辺が見つかっていません。そこで、今回の調査では第17次調査の南側を対象に、外郭西辺の構造や規模、変遷の確認、そして、調査区に礎石状の大型の石が点在することから、外郭西辺に伴う施設の有無の確認を目的としています。



第1図 第93次調査区の位置

調査成果

調査地点は、政庁から北西に約560m、外郭西門から北に約480mの位置にあります。多賀城跡の北西隅にあたり、西側の低湿地に向かって大きく張り出す丘陵上に立地しています(第1図)。

調査区の地形は、北東側が高く南西に向かって傾斜し、調査区の南端は南側の低湿地に向けて急傾斜します。また、調査区の北側では、北西から南東方向や北東から南西方向に延びる帯状のくぼみがあります。

発見した遺構は、門、築地塼、通路、整地層などです。各遺構や堆積層、表土から、土師器、須恵器、中世陶器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、鉄釘が出土しました。なかでも、瓦が多く、全体の9割以上を占めています。

今回の調査の主な成果としては、次の2点があります。



写真1 調査区の位置(北から) 第93次調査区



写真2 調査区近景(南から)

成果1 平安時代の門を発見

調査区の南側でこれまで知られていなかった門を新たに発見しました(第2図)。門は八脚門で、掘立式から礎石式に建て替えられていることがわかりました。

掘立式の門は、東西2間(4.6m)、南北3間(8.1m)です。これまで多賀城跡で見つかった八脚門の中で最も小さい規模です。柱穴は10個確認され、一辺1m前後の方形で、深さは70cm、柱は直径30cm程です。柱を据えてから埋め戻した土には、焼土や炭が含まれています。基壇は残っていませんでした。



写真3 掘立式の門(西から)



写真4 南東隅の柱穴の断面(北から)

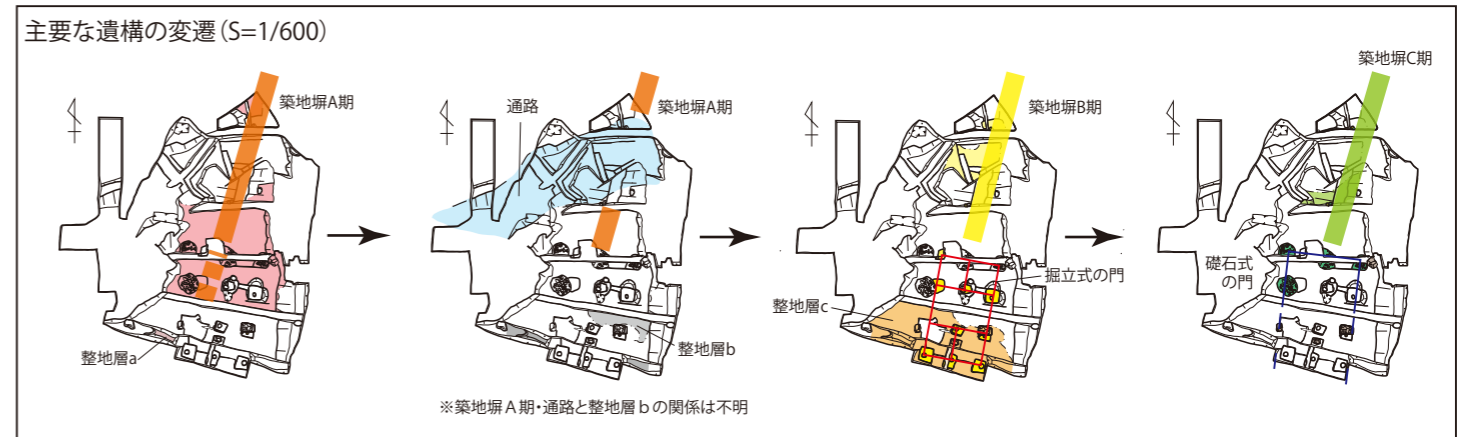
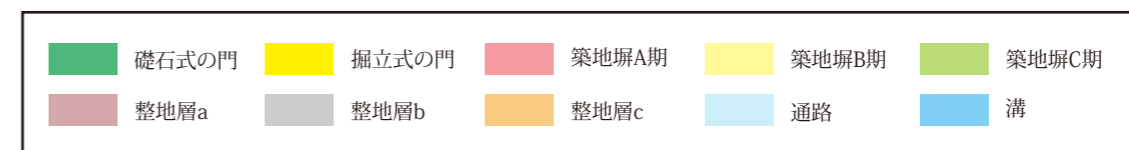
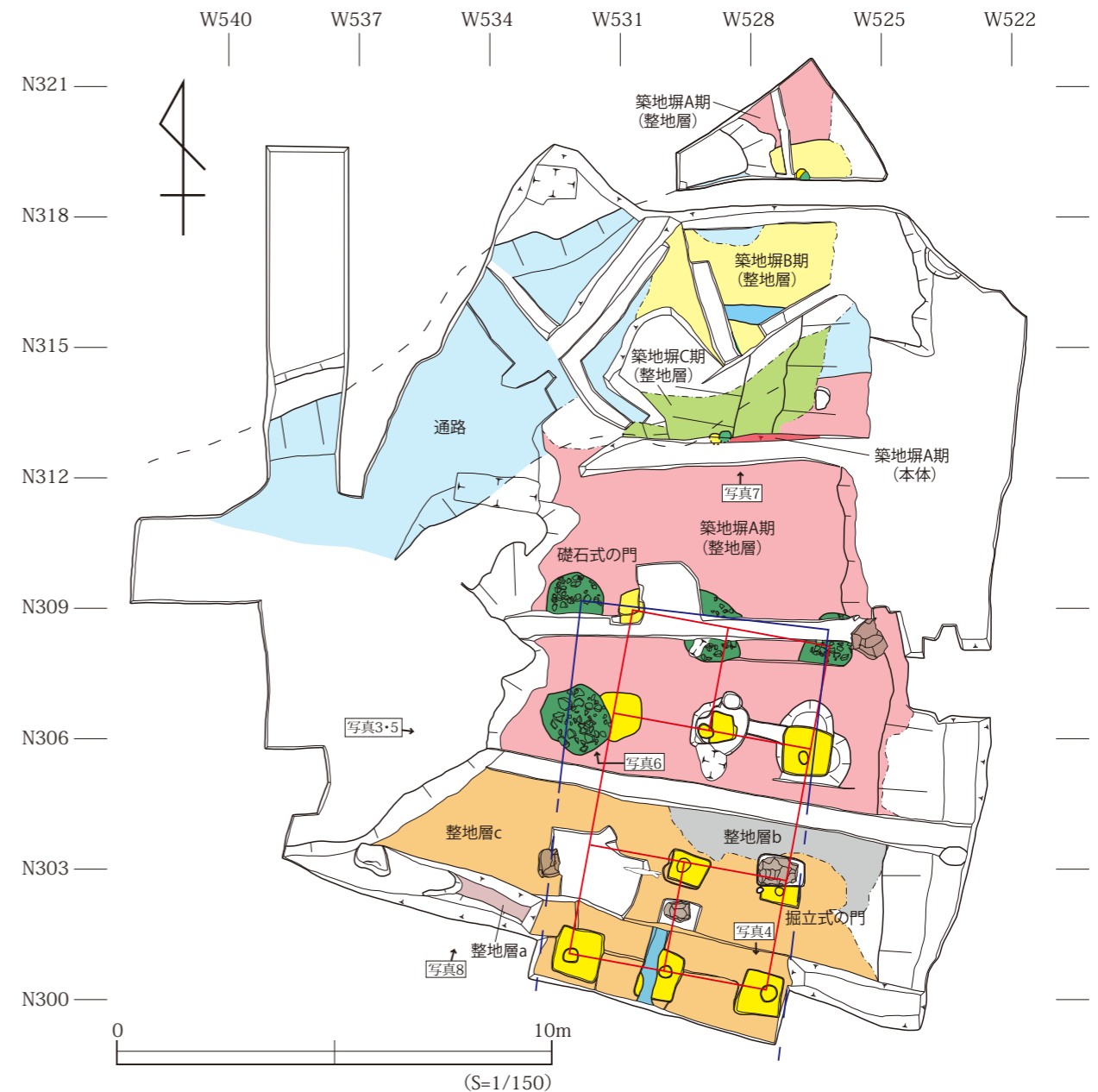
礎石式の門は、東西2間(6.0m)、南北3間(推定10m程)で、これまで知られていた南方約480mに位置する平安時代の礎石式の外郭西門とほぼ同規模であったとみられます。周辺から多くの瓦が出土しており、瓦葺きであったと考えられます。礎石を据えた穴は4個確認され、直径1.5m程の楕円形で、深さは30~70cmです。調査区内の大型の石は、元の位置から動いていますが、本来はこの門の礎石であったと考えられます。基壇は残っていませんでしたが、その上面の高さは礎石の大きさから、遺構を確認した面より40cm程度上だったと推定されます。



写真5 礎石式の門(西から)



写真6 礎石据え穴の断面(南から)



第2図 調査区平面図